説教20210606　列王記下5：1-15 マルコ1：40-45

「強者ナアマンの弱み」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

病を得る、という表現がありますが、そのように、病というものは、ある時、我が身にやってくるものでもあるでしょう。病が我が身にどこからともなく移ってくるという意味では、広く言えば、全ての病は伝染病だと言えるかもしれません。今、私たちがその渦中にある、新型コロナウィルス感染症という病は、誰から移ったのかを調べていけば、その因果関係がはっきりするような病ですので、この病が伝染病であることを疑う人はいないでしょう。しかし、虫歯とか、あるいは盲腸とか言った病が、伝染病だと言い切る人がいたら、皆さん首をかしげることでしょう。でも、ちょっと調べてみましたら、虫歯というのはまぎれもない感染症ですし、盲腸も、患部に、ある細菌が感染することによって症状が現れる感染症らしいです。

全ての病気は、我が身に伝わってきて、もたらされたものというのはそういう意味です。では病気が治るというのはどうでしょうか。それは、病を得ることの反対ですから、病が去る、ということだとも言えるでしょう。

私たちが、病を得ている間、私たちは多くの人たちの協力や援助が必要になるでしょう。そして私たちが病を得ている間は、人間関係を深める好機になるかもしれません。病弱ですぐに床に臥せってしまう子供のほうが、手がかからない元気な子供よりも、親の愛情は多く注がれるかも知れません。又、入院すれば、隣り合ったベッドで共に生活していくうちに、そこでしかありえないような、深い愛情がその間に育まれるかも知れません。

私たちは、病気をなくしてしまおう、という発想に取りつかれ、そのために奮闘努力する場合も多々あるでしょうが、それだけではないのかも知れません。そもそも、この地上から全ての病気をなくしてしまうことは、無理、ということが知らされている様ですし、では、私たちはどうすればよいのでしょう、という問いが投げかけられているように思います。

聖書には、医者はあまり登場しません。聖書では病の人は数多く登場しますが、医者は登場しなくて、かわりに、主なる神の癒しを祈り願う人の姿が見られます。

主なる神が私たちを癒して、病気をなおしてくださる方法は、今日のマタイ福音書で主イエスが、病人を深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、声を掛けられる、というのがその典型です。主イエスは、ひざまずいて助けを求める病人に癒しをお与えになります。

主イエスが「よろしい。清くなれ」というと、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった、と書いてあります。この人から病気は去りました。病気がなおったこの人に主イエスはすぐさま、立ち去るように言って、厳しく注意をします。つまり、主イエスの業は、この一人の病人から病気を去らせることで終わったのではなかったのです。主イエスは病人に次のように言われました。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」

ここで私たちは病気が伝染するものだということを思い起こしましょう。主イエスは、なおったあなたは、自分の口に気を付けなさい、と厳しく言われました。それは、今の世に照らせば似たような危険性を私たちは感じられるでしょう。伝染する病気の前で私たちは、それが拡散しないように一方では隔離する措置を講じつつ、他方では、その病気に接近して、病気を直そうとしています。この隔離と接近という相反する行いの間で私たち人間は戸惑い、どうすればよいのでしょうという問いを発し続けています。マルコ福音書の時代も、ある一人の病人の重い皮膚病が治った、ということには隔離措置から解除されるための社会的な儀式を受ける必要がありました。ただ、その皮膚病が完治された、というだけでは人々は納得しなかったのです。そこら辺の儀式に関わる規定がレビ記に記されています。まず、重い皮膚病にかかった人が受ける、厳しい隔離措置がレビ記13章45節から46節に記されています。「重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆い、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわらねばならない。この症状があるかぎり、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない。」とあります。そして、その皮膚病が治ったときは、その人は、祭司のもとに連れられて行って、体を調べられて、治っているならば、祭司はそれから、生きている清い鳥2羽、杉の枝、ひ糸、ヒソプの枝などを用意して、清めの儀式に入るということがとりきめられていました。つまり、この儀式が終わらない限り、その人は宿営のうちに戻ることが許されなかったのです。主イエスは、マルコ福音書の重い皮膚病だった人が、考えもなしに無邪気に、自分は治ったよ！と言いふらすことの、社会的な危険性を熟知していました。なぜならば、そのようにして、主イエスの病気を癒す力が社会に知られるようになると、当然、今まで、清めの儀式を行ってきた祭司たちの反感や怒りを買うことが分かっていたからです。

主イエスのなされた癒しの業は、人間の医者が施す治療とは大きな違いがありました。この人が、主イエスに癒されたことで、今まで祭司から受けてきた儀式のことも忘れて、主イエスのことを人々に言い広め始めたのは、人一人にとどまらないような、癒しの業を主イエスがこの時はじめられたからに他ならないでしょう。

さて、今日の旧約聖書の列王記の箇所に入りますが、この主イエスが生まれる前の時代のイスラエルにも、主イエスはおられます。主イエスは、時と場所を超えてどこにでもいることが出来るからです。確かに旧約聖書では、イエスキリストという名前は語られませんが、でも現れているのです。今日の列王記の箇所で言えば、今日の聖句でも取り上げました、5章３節の「御主人様がサマリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえるでしょうに。」という少女が発した一言に、主イエスが現れているように思います。「御主人様がサマリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえるでしょうに。」と言ったこの少女がいくつ位かは分かりませんが、この少女は、あたかも、主イエスの癒しの業を知り、それを言い広めたマルコ福音書の元病人の様であります。この少女にとって、主人ナアマンの重い皮膚病を直すことは、全く自分に課せられた役割ではありませんでした。それどころか、この少女は、ナアマンと直接的な主従関係や労使関係はなかったと言ってよいでしょう。なぜならば、この少女はナアマンの妻の召使であったからです。しかし、この少女とナアマンの関係には、国家が関わっていました。彼女は国家の捕虜として、イスラエルからナアマンたちが暮らすアラムの国へと連れてこられていたのでした。ここら辺の設定に、このナアマンという一軍司令官がかかった重い皮膚病が、国家間の問題にまで発展させられた理由があるかと思います。この少女は駆け引きではなく、そうであってほしいという純朴な願いをこめて、「御主人様がサマリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえるでしょうに。」と漏らしたのでした。しかし彼女のこの一言はやがて、ナアマンの耳に入り、アラムの王の耳にも入り、アラムの王はイスラエルの王に手紙と共に、銀十キカル、金六千シェケル、着替えの服十着をもたらしたのでした。イスラエルの王は、このことを、この少女の純朴な願いの様には、受け取りませんでした。イスラエルの王の言いぐさによると、まるでこれらの金銀の対価としての癒し、取引としての治療を彼が思い描いていることが推し量れます。人がおかれ立場というものはおそろしいもので、イスラエルの王は、銀十キカル、金六千シェケルをもらっても、全く喜ぶことが出来なかったばかりか、このことを皮膚病の男にかこつけた言いがかりという風にしかとることが出来なかったのです。

イスラエルの王は、衣を裂いたと書いてありますが、衣を裂くというのは激しい情念に取りつかれて自分を律することが出来ない状態ですが、そこでこの王に諫言をした神の人エリシャは王を恐れることなくその業を行いました。ここにも主イエスの業が現れていることでしょう。

イスラエルの王はエリシャに言われた通りにします。そして、ナアマンは神の人エリシャの家に赴くことになります。しかし、エリシャはナウマンに直接会おうともせず、人を使わせて、ナウマンに「ヨルダン川に行って七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります。」と告げさせてのでした。ナアマンにしてみれば、王様を介して、いわばお国を背負ってやってきたのに、なんとそっけない、あるいはぞんざいな仕打ちかと、思ったことでしょう。ナウマンも又激しい怒りに取りつかれ、憤慨しながら、エリシャの家から去っていったのでした。

しかし、またここで憤慨するナウマンにも諫言する者が現れます。ナウマンの家来たちが彼に近づいて「わが父よ、あの預言者が大変なことをあなたに命じたとしても、あなたはそのとおりなさったにちがいありません。あの預言者は、『身を洗え、そうすれば清くなる』と言っただけではありませんか。」といったというのです。ここでもこの家来たちは相手の荒ぶる心を鎮めているのです。エリシャがイスラエルの王の心を鎮めたのと同様です。ここにも又主イエスの御業が現れているのではないでしょうか。

そうしてナウマンはついに言葉通りにヨルダン川に７度身をひたし、体を元通りにされ、子供の体のようになって清くなったということです。

ナウマンはこののち、神の人エリシャのところに引き返し、神をほめたたえつつ、エリシャに贈り物をしようとしますが、エリシャは受け取らなかったのでした。

私たちはこの癒しの成り行きを黙想するとき、人間たちの荒ぶる心と、それに比べて、静かでかつ着実な主イエスの御業との見事な対比に目を見開かされることでしょう。このように人間の業というのは、様々な的外れの儀礼に彩られ、制御できない駒のように世界を駆け巡らされているかのようです。ナアマンはアラムの王様の御前で重んじられ、地位がある強いものでありましたが、それがかえってあだとなって、素直な癒しを受けるということから遠ざかっていたのです。しかし主イエスはそこに現れて、様々な人を用いて、ナアマンをまことの癒しへと導いたのでした。

私たちは、各自の目の中にある梁を取り除いて、この少女や、エリシャや、ナアマンの家来たち、そしてついにはナアマン自身に現れた、主イエスの癒しの御業を見続けていきたいと願います。私たちは病にかかり、弱くされた時にこそ、この主イエスの御業をよく見て、それを言い広めることが出来るようにされるのです。

お祈りいたします

天の憐れみ深い

あなたは悪いものではなくよいものを私たちに与えようとされます。どうか私たちが素直に手を差し出してその恵みを受けていくことが出来ます様に。そしてあなたが定めている癒しの時を、私たちにお与えください。

私たちが、心の高ぶりによって、あなたの静かな救いのみ声が聞こえないようになる危険からお救い下さい。

今、病を得て苦しむ方々を覚えます。どうかこの人々を憐れみ、恵みによってその体と心を強め、その病を去らせてください。苦しみの中にあっても、やがて訪れる癒しの時を信じて、あなたに感謝と賛美をしていくことが出来ますよう私たちを強め導いてください。

父と聖霊と共に一体